

自尊感情を育てる道徳の時間の工夫 —自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラムを通して—

江田島市立鹿川小学校 河野 諭恵

研究の要約

本研究は、自尊感情を育てる道徳の時間の工夫について、「自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム」の開発を通して明らかにしようとしたものである。文献研究から、道徳の時間において、自己評価の力を高め、教科・領域等との関連を図って計画的に指導することは、自尊感情を育てることにつながることが分かった。そこで、自分のよい所を伸ばす意欲を引き出すことを目指し、道徳の時間と実践の場となる学級活動との関連を図った「自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム」を開発した。具体的には、「よい所や悪い所に気付く」「よい所を見つめる」「よい所を伸ばそうとする」の三つの段階を設定し、他者とのかかわりや道徳学習ノートの活用を取り入れた。その結果、児童の自分のよい所を伸ばす意欲を引き出し、自尊感情を育てることにつながることが分かった。

キーワード：自尊感情 道徳学習プログラム

I 研究の目的

中央教育審議会答申（平成20年）の中で、道徳教育改善の基本方針として、子ども達が健全な自尊感情をもち、主体的、自律的に生きること等が示された。そして、小学校学習指導要領（平成20年）道徳では、中学年に新たな内容項目「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」が加わり、小学校段階から自尊感情を育てることが強く求められている。

平成24年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査によると「自分には、よいところがあると思いますか」の問い合わせに対して、「当てはまる」は小学校32.6%，中学校24.3%であり、自尊感情の低さに課題が見られた。また、所属校の中学校区（3小学校）の道徳アンケート調査で「自分にはよい所がある」の問い合わせに対して、「そう思う」と回答したのは、低学年約80%，中学年約50%，高学年約20%であった。学年が上がるにつれて自尊感情が低くなっている、特に、中学年から自尊感情が低くなる傾向が見られた。

これらのことから、小学校段階から自尊感情を育てることが必要であると考え、道徳の時間と実践の場となる学級活動との関連を図った道徳学習プログラムを開発する。

開発に当たっては、自尊感情が低くなる傾向が見られる中学年において、新たに加わった内容項目「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」を扱い、自尊感情を育てることを目的とする。

II 研究の基本的な考え方

1 自尊感情について

(1) 自尊感情とは

「心理学辞典」によると、自尊感情は「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」¹⁾と説明されている。

また、ポープラ（1992）は、自尊感情の訳語であるセルフエスティームについて、二つのことを述べている。一つ目は、セルフエスティームは、自己概念に含まれている情報を評価することであり、自己概念についての評価に伴う感情であるということ。二つ目は、セルフエスティームは、自分を評価する際、何の領域に価値をおくかにかかっており、子ども達が価値をおく領域は、学校と家庭における生活構造や学習や成長における発達課題によって、似た傾向が見られるということである。

そして、小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年、以下「解説」とする。）には、自尊感情として自分への信頼感や自信などが挙げられている。

これらのことから、本研究において自尊感情は、自己に対する評価の感情とし、自己を肯定的に評価することにより、自分自身を価値あるものととらえる感情と考える。

(2) 自尊感情を育てるとは

梶田叡一（1987）は、望ましい自己認識・自己概

念について、自分自身について多面的に理解し、自己の現実をそのままの形で受容することと述べ、自己をとらえるとき、自分のよい所や悪い所の両面から、あるがままに受け止めることができ望ましいことを示している。自己があるがままに受け止めることは、自尊感情を育てていく上でも大切であると考える。

また、自己をとらえて評価する際、肯定的に評価することが望ましいことから、肯定的な評価につながる多様な見方や価値観を育てることも、自尊感情を育てる上で大切であると考える。自己を肯定的に評価し、自分自身を価値あるものととらえたとき、自己を伸ばすことに前向きになり、次への意欲が湧いてくると考えられる。

これらのことから、自尊感情を育てるとは、よい所や悪い所の両面から自己をとらえ、多様な見方や価値観で自己を肯定的に評価できるようにすることと考える。

(3) 自尊感情を育てることと道徳の時間との関連

「解説」の道徳教育改訂の趣旨の一つとして、道徳教育の充実により自尊感情を育てることが挙げられており、永田繁雄（2006）は、自己評価の力を高めて、自尊感情を育てるという考えを示している。そして、道徳の時間は、道徳的価値の自覚を深め、自己理解を深めていくことから、自己評価の力を高めていく時間であると述べている。

このことから、自尊感情を育てるためには、自己評価の力を高める道徳の時間の充実が重要になると考える。

また、児童の自尊感情を育てるためには、小学校学習指導要領（平成20年）道徳の中學年に新たに加わった内容項目である「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」を扱うことが有効であると考える。

そこで、教育活動全体を通じて行う道徳教育の要の道徳の時間と、教科・領域等との関連を図り、計画的に指導を行う。

具体的には、自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム（以下「道徳学習プログラム」とする。）を開発することに取り組んだ。

2 自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラムについて

(1) 自分のよい所を伸ばすとは

子ども達が自分の内面的な特徴を理解することは、容易ではないことについて、榎本博明（1996）は、小学校中学年になっても、自分の得意・不得意や長所・短所など、自分の内面的な特徴を理解する

ことは難しいと述べている。しかし、個性の伸長において、自分の特徴を理解することは必要なことである。荒木篤人（2009）は、個性の伸長を図るために、自分の特徴などを知り、自己を深く見つめ、さらによさを伸ばそうとすることが重要であると述べ、「自分の特徴を知る」「深く見つめる」「よさを伸ばそうとする」という個性の伸長における段階を示している。

これらのことから、よい所を伸ばすためには、自分のよい所や悪い所の両面に気付くことが、第一段階になると見える。第二段階は、第一段階で気付いたよい所と悪い所のうち、よい所を見つめさせが必要であると考える。そして、第三段階は、それまでにつけた自信をもとに、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すことができると考える。

そこで、「道徳学習プログラム」の開発に当たっては、「よい所や悪い所に気付く」「よい所を見つめる」「よい所を伸ばそうとする」の三つの段階を設定し、自分への気付きが深まり、発展していくよう工夫する。

(2) 他者とのかかわりの重要性

自己をとらえる際、他者とのかかわりが大きく影響を与えるということについて、石田勢津子（1995）は、「いろいろな仲間とのかかわりをとおして、子どもたちは、自分の性格や能力を他者と比較し、評価する機会を得る。」²⁾と述べている。また、蘭千尋（1992）は、学童期に達した子ども達は、家族とともに教師や仲間との相互作用を通して自己概念を形成していくと述べている。

以上のことから、他者とかかわることで、自分への気付きが増え、自分のよい所を伸ばすことにつながると考える。

そこで、「道徳学習プログラム」では、各段階において、よい所を伸ばすことにつながるような他者とのかかわりを計画的に仕組む。他者は、児童にとって重要な他者である家族、友達、教師になるが、本研究では、家族と友達とのかかわりを仕組む。友達とのかかわりは、よい所を互いに伝え合うこと、認め合うこと、話し合うことを取り入れる。また、家族とのかかわりは、記述による児童への肯定的評価を取り入れる。

このように、他者とのかかわりを仕組むことで、「道徳学習プログラム」の効果を高めることができると考える。

(3) 道徳の時間と学級活動の関連を生かす

他者とのかかわりを仕組むために、道徳の時間と

教科・領域等との関連を図り、計画的に指導を行うことが有効であると考える。

田沼茂紀（2013）は、「特別活動と道徳の時間について、学級活動の内容と深く関連する道徳の内容項目とを配慮して指導することがより大きな指導効果を生むこととなる。」³⁾と述べている。また、中学年道徳の時間と学級活動を考えたとき、道徳の時間の「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」と、学級活動の「夢や目標をもって生きる態度の形成」は、自己の理解を深め個性の伸長を図るという内容において関連が深い。

のことから、道徳の時間と学級活動を「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」点から関連付けて指導することは、効果があると考える。

(4) 道徳学習ノートの工夫

「道徳学習プログラム」では、道徳の時間と学級活動をつなぎ、自分のよい所を伸ばす取組において、児童の心情や態度を継続・発展させていくものとして、道徳学習ノートを活用し、それぞれの学習の記録を残すことが有効であると考える。

そこで、道徳学習ノートを次の視点で工夫して活用する。一つ目は、「道徳学習プログラム」において、自分の考え方や気付きなどを記録し、各学習がつながるように振り返る点である。二つ目は、自分の気付きだけでなく、他の児童や家族が記入したものを貼り付ける欄などを設けて、他者からの肯定的な評価により、自分のよい所を伸ばす意欲を高める点である。

このように道徳学習ノートを工夫し、自分のよい所を伸ばすことに対する児童の心情や態度が継続・発展していくことに役立てる。

これまでの考えをもとに、「道徳学習プログラム」の構想図を図1に示す。

(5) 道徳の時間における工夫

道徳の時間に、他者とのかかわりと学級活動の関連を生かすために、自己を見つめる時間となる展開後段を工夫する。具体的には、展開後段に、書く活動を取り入れ、自分や友達のよい所についての考えを深めたり、よい所を伸ばすことについて具体的に考えたりする時間を確保する。その際、道徳学習ノートを活用して学級活動におけるよい所見つけ等の活動を振り返り、考えを深めることに役立てる。また、道徳の時間と学級活動の関連を図り、よい所を見つける活動を行うために、帰りの会で一日を振り返って自分や友達のよい所を記録する等の、日々の取組も大切であると考える。

次頁図2に「道徳学習プログラム」を示す。

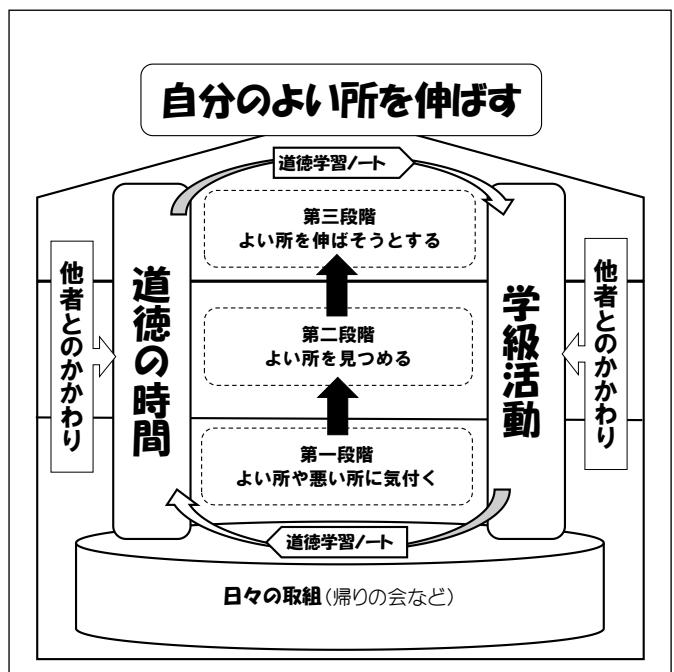


図1 自分のおい所を伸ばす道徳学習プログラム構想図

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

「自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム」を道徳の時間と学級活動との関連を図りながら、「よい所や悪い所に気付く」「よい所を見つめる」「よい所を伸ばそうとする」の三つの段階を設定し、他者とのかかわりを仕組み、道徳学習ノートを活用することで、児童の自尊感情を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

検証の視点	方法
「道徳学習プログラム」に三つの段階を設定し、他者とのかかわりを仕組んだことは、自分のよい所を伸ばす意欲を引き出すのに有効であったか。	よい所アンケート (事前・事後) 道徳学習ノート 授業記録 道徳の時間アンケート
道徳学習ノートは、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すのに有効であったか。	道徳学習ノート 授業記録 道徳の時間アンケート
「道徳学習プログラム」を通して、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出し、自尊感情を育てることができたか。	自尊感情アンケート (事前・事後) 道徳学習ノート 道徳の時間アンケート

段階	学習計画	道徳の時間と学級活動の工夫	道徳学習ノートの活用	児童の意識の流れ
《第三段階》 よい所を伸ばそうとする 	⑤道徳の時間 主題「自分らしさを生かす」 1 - (5) 個性の伸長 資料「中村選手は中村選手、ぼくはぼく」	<展開後段> 自分のよい所を伸ばす方法を考え、友達と話し合うことで、意欲を引き出す。よい所を伸ばす方法への家族の応援メッセージを取り入れる。	自分のよい所を伸ばす方法を考え、家族から応援メッセージをいただく。	自分のよい所を伸ばす生き方は、すてきだな。よい所を伸ばしたい。
《第二段階》 よい所を見つめる 	④学級活動 「自分のよい所トップ3」 カードをもとに自分のよい所を三つ選び、順位をつける。選んだものを友達と話し合い、自分のよい所を見つめる。 ③道徳の時間 主題「自分らしさ」 1 - (5) 個性の伸長 資料「じやがいもの歌」	自分のよい所を選んだり、よい所に対する友達の考えを聞いたりすることで、自分のよい所を見つめさせる。	友達や家族からもらったよい所カードから、自分のよい所トップ3を考える。	自分にはよい所があるな。友達がよい所を認めてくれて、うれしいな。
《第一段階》 よい所や悪い所に気付く 	②学級活動 「友達と自分のよい所みつけ」 友達のよい所をカードに書き、伝え合う。友達のよい所を見つけることを通して、自分のよい所や悪い所に気付く。 ①道徳の時間 主題「友達のよさ」 2 - (3) 信頼・友情 資料「貝がら」	友達のよい所を4人グループで伝え合い、いろいろな自分のよい所や悪い所に気付かせる。	友達や家族からもらったよい所カードを記録として残し、次の段階で振り返ることができるようする。	友達には、いろいろなよい所があるな。自分にも、友達と似ている所や違う所があるな。

図2 自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム

3 検証のためのアンケート

自尊感情が育ったかを検証するために、「道徳学習プログラム」の事前と事後に24項目からなる自尊感情アンケートを4段階評定尺度法で実施した。また、自尊感情アンケートの24項目をポープラ(1992)の理論をもとに、社会①、社会②、家庭、学習、運動、総合の六つの領域で区分して変容を見た。表2に自尊感情アンケートの項目と領域について示す。

なお、「悪い所」は、授業やアンケートでは「直したい所」と表現し、児童がとらえやすいようにした。

表2 自尊感情アンケートの項目と領域

他者との関わり(4項目)	社会①領域
他者からの受容(4項目)	社会②領域
家族との関わり(4項目)	家庭領域
学習について(4項目)	学習領域
運動について(4項目)	運動領域
自己全体について(4項目)	総合領域

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期間 平成25年6月25日～平成25年7月16日
- 対象 所属校第3学年(1学級20人)

2 授業の概要

道徳の時間と特別活動との関連を図った「道徳学習プログラム」において、2-(3)信頼・友情、1-(5)個性の伸長を主題として授業を行った。道徳の時間の概要と実施状況を、次頁表3に示す。

V 研究授業の分析と考察

1 「道徳学習プログラム」は、自分のよい所を伸ばす意欲を引き出すのに有効であったか

(1) 自分のよい所や悪い所に気付くことができたか(第一段階)

道徳の時間1で自分のよい所に気付いたかについて、道徳の時間1のアンケート結果(図3)をもとに分析を行った。

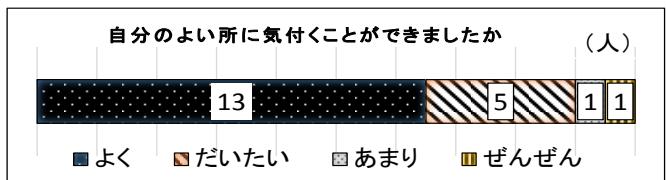


図3 道徳の時間1のアンケート結果

道徳の時間1のアンケート「自分のよい所に気付くことができましたか」に、18人が肯定的な回答をした。また、事前のよい所アンケート「自分にはよい所があると思いますか」に否定的に回答していた児童4人のうち3人が、このアンケートでは、よい所に気付くことができたと回答していた。

変容した3人の児童は、「自分のよい所に気付くことができたのは、どんな時でしたか」の問いに、「友達に教えてもらったとき」と回答していた。

のことから、道徳の時間1で、友達からよい所を教えてもらうことや、友達のよい所に目を向けるような他者とのかかわりが、自分のよい所に気付くことにつながっていることが分かる。

また、学級活動「友達と自分のよい所みつけ」では、グループでよい所を伝え合い、いろいろな自分のよい所をとらえられるようにした。活動後は、自分のよい所と直したい所を記述する時間を設定した。事前のよい所アンケート「自分には直したい所があると思いますか」では、8人(40%)の児童が「ないと思う」と

回答したが、この振返りにおいて「直したい所がない」と記述したのは、3人に減少した。

これらのことから、第一段階の道徳の時間と学級活動で、友達や自分のよい所を見つけることを通して、自分と友達の違いに気付き、自分のよい所と悪い所をとらえられるようになった児童が増えたと考えられる。

(2) 自分のよい所を見つめることができたか(第二段階)

道徳の時間2で自分のよい所を見つめることができたかについて、道徳の時間2のアンケート結果(図4)及び児童の記述から分析を行った。

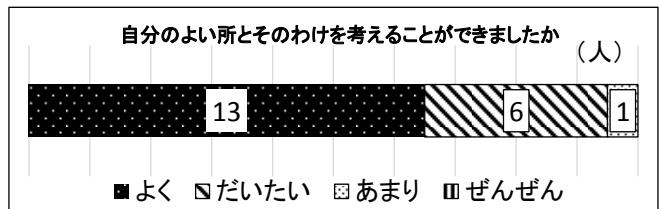


図4 道徳の時間2のアンケート結果

表3 道徳の時間の概要と実施状況

	道徳の時間1	道徳の時間2	道徳の時間3
月日 主題 内容項目	6月25日 友達のよさ 2-(3)信頼・友情	7月3日 自分らしさ 1-(5)個性の伸長	7月16日 自分らしさを生かす 1-(5)個性の伸長
ねらい 資料名 【出典】	中山君にもらった貝殻を見つめながら、友達のよさを感じているぼくの気持ちを考えることを通して、友達のよい所を見つけ、互いに理解信頼し、助け合う心情を育てる。 「貝がら」【文溪堂】	じやがいもを選びながら、自分らしさについて意識したさとしの気持ちを考えることを通して、自分のよい所や悪い所に気付き、よい所を伸ばそうとする心情を育てる。 「じやがいもの歌」【東京書籍】	中村選手の苦労や努力を知り、自分らしさを生かそうと思ったぼくの気持ちを考えることを通して、自分のよい所を生かし、伸ばそうとする態度を育てる。 「中村選手は中村選手、ぼくはぼく」【光文書院】
主な 学習の 流れ 主な発問 (○) 中心発問 (◎)	1 友達のよさについて考える。 2 資料を読んで、話し合う。 ○ぼくは中山君のことをどう思っているでしょう。 ○中山君が黙っていた理由が分かったとき、ぼくは中山君のことをどう思ったでしょう。 ○貝がらをながめながら、ぼくは中山君のことをどう思ったでしょう。 3 友達のよい所を考え、伝える。 4 教師の説話を聞く。	1 友達に教えてもらったよい所を思い出す。 2 資料を読んで、話し合う。 ○じやがいもを選ぶさとしは、どんなことに気付いたでしょう。 ○とおるに似たじやがいもを見て、さとしはどんなことを考えたでしょう。 ○じやがいもを選びながら、さとしは、自分についてどんなことを考えたでしょう。 3 自分のよい所について考え、友達と話し合う。 4 詩の朗読を聞く。	1 中村俊輔選手の活躍について知る。 2 資料を読んで、話し合う。 ○ぼくは中村選手と比べられて、どんな気持ちでしょう。 ○本を読んで、ぼくは中村選手をどう思ったでしょう。 ○中村選手の頑張りを知って、ぼくはどんなことを頑張ろうと思ったでしょう。 3 自分のよい所を伸ばす方法を考え、友達と話し合う。 4 自分らしさを生かして活躍している「水木しげる」を知る。
実施状況	展開後段では、友達のよい所を書くのに時間がかかる児童がおり、日々の取組による友達のよい所の記録をヒントに考えさせた。友達から自分のよい所を教えてもらうときは、どの児童も嬉しそうな様子だった。	展開後段では、自分のよい所とそのわけを考えて書くときに、多くの児童が友達や家族に書いてもらったよい所を自分のよい所としてあげていた。自分のよい所は書くことができたが、その理由を書くことが難しい児童がいた。	展開後段では、児童は道徳学習ノートを振り返りながら、自分のよい所を伸ばすためにできることを考えることができた。終末では、中村選手とは違う分野で自分らしさを生かしている「水木しげる」の話を児童は興味深く聞いていた。

道徳の時間2のアンケート「自分のよい所とそのわけを考えることができましたか」に、19人（95%）の児童が肯定的な回答をした。

また、事前と道徳の時間2での自分のよい所の記述内容を見ると、表4の下線部のように、道徳の時間2で記述内容が増えている。各児童における自分のよい所の記述内容も比較してみると、道徳の時間2では、18人（90%）の児童が事前には記述していなかったよい所を記述していた。

「道徳学習プログラム」に他者とのかかわりやよい所を見つめる時間を仕組むことで、多様な見方や価値観が育ち、自分をいろいろな面からとらえることができるようになったと考えられる。

表4 自分のよい所についての主な記述内容

領域	事前	道徳の時間2
社会 ①②	ものを拾ってあげる、ものを貸してあげる、困っている人を助ける、サッカーを教える、リコーダーを教える、自分から話す、みんなが困っている時に考えを出した、大丈夫と言ってあげる	ものを拾ってあげる、ものを貸してあげる、困っている人を助ける、勉強を教える、友達に話しかける、アイディアを出す、挨拶をする、周りの様子に気付く、みんなを笑わせる、友達を褒める
家庭	手伝いをする	手伝いをする、お母さんに元気を与えていたり、弟や妹の面倒を見る、家の人に笑顔にする、留守番をする
学習	字がきれい、進んで発表をする、頭がいい	字がきれい、進んで発表をする、勉強ができる、姿勢がよい
運動	なし	なし
総合	なし	落ち込まない、優しい

道徳の時間2に続き、学級活動「自分のよい所トップ3」では、自分のよい所を三つ選び、友達と話し合い、自分のよい所を見つめる時間にした。

自分のよい所について、なぜそれらをトップ3に選んだのかを二人組で伝え合い、気付いたことや感じたことを話し合う中で、児童は友達や家族からのカードをもとに自分のよい所を見つめていた。

「自分のよい所トップ3」において、自分のよい所を見つめたことが分かる児童の感想を次に示す。

- ・自分のよい所は優しい所かなと思いました。そして、友達が優しいと言ってくれて、安心しました。
- ・ぼくは、ソフトボールがそんなに上手くないと思ったけど、友達が上手だと言ってくれて、うれしかったです。
- ・自分は、勉強が得意だと思っていなかったけど、友達が教えてくれて、勉強が得意だと気付きました。

「自分のよい所トップ3」についての児童の感想の一部

これらの感想から、児童は話合いを通して、自分のよい所を再認識したり、友達から見た自分に気付いたり、新たに自分のよい所にも気付いたりするなど、自分を見つめていることが分かる。

道徳の時間2のアンケートで1人だけ「あまり」と回答したA児は、道徳の時間1の事後アンケートでは、「自分のよい所に全然気付くことができなかつた」と回答していた。しかし、道徳の時間2で、自分のよい所を見つめた時、学級活動を振り返り、自分のよい所を書くことができた。

これらのことから、第二段階の道徳の時間と学級活動では、友達や家族から教えてもらったよい所をもとに、自分のよい所とその理由を考え、友達とかかわりながら自分のよい所を見つめていくことができたと考えられる。

(3) 自分のよい所を伸ばそうとすることができたか（第三段階）

道徳の時間3で自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すことができたかについて、道徳の時間3のアンケート結果（図5）及び児童の記述から分析を行った。

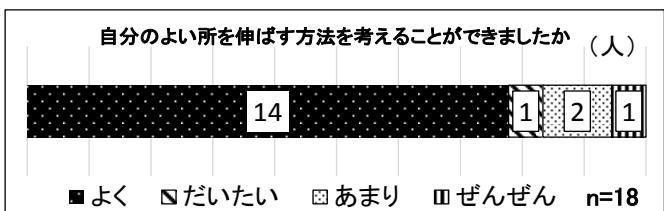


図5 道徳の時間3のアンケート結果

「自分のよい所を伸ばす方法を考えることができましたか」の問い合わせに、15人（約83%）が肯定的な回答をしている。また、自分のよい所を伸ばす方法についての児童の記述を見ると、児童は本時までに見つめてきた自分のよい所に対して、自分なりによい所を伸ばす方法を考え、次のように今後の具体的な姿勢を示すことができた。

- ・困っている人を見つけて、進んで助ける。
- ・手伝いで「ありがとう」と言われることをがんばる。
- ・勉強を何倍もする。

自分のよい所を伸ばす方法についての記述の一部

また、「あまり」と回答した児童2人も、道徳学習ノートには、自分のよい所を伸ばす方法を書くことができていた。「ぜんぜん」と回答した児童も、道徳学習ノートの「自分のよい所トップ3」の記述を振り返らせる等の支援を行い、がんばる所を伸ばしたいという考えをもたせることができた。

2 道徳学習ノートは、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すのに有効であったか

道徳学習ノートが道徳の時間と学級活動をつなぎ、よい所を伸ばすことに有効であったかについて、道徳の時間2・3のアンケート結果（図6）及び児童の様子から分析した。

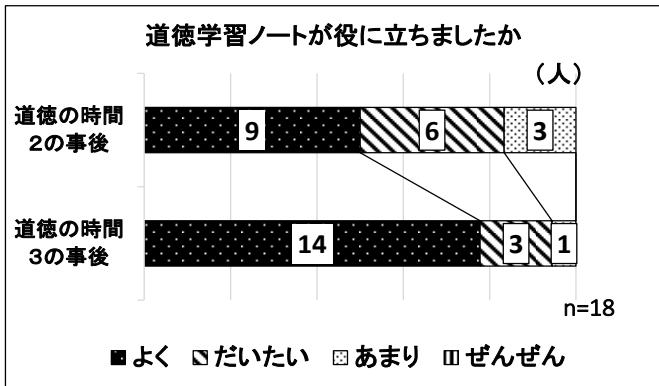


図6 道徳学習ノートの有効性について

「自分のよい所を考えるために道徳学習ノートが役に立ちましたか」について、道徳の時間2と3のアンケートを比較すると、「道徳学習プログラム」が進むにつれて、肯定的な回答が増えていることが分かる。道徳の時間2と3で、道徳学習ノートの記述を見直しながら、自分のよい所を見つめたり、よい所を伸ばす方法を考えたりする児童の姿が見られた。次に、道徳学習ノートが役に立ったことが分かる児童の記述を示す。

- ・自分のよい所とそのわけを考えるときに、よい所ノートを見たら、たくさんヒントが書いてあった。
- ・よい所ノートを見たら、自分のよい所がいっぱいあった。

道徳学習ノートの有効性についての児童の記述の一部

これらの記述から、「道徳学習プログラム」のそれぞれの学習を道徳学習ノートがつなぎ、記録された自分の考えや気付き及び友達や家族から教えてもらったよい所が、次の段階で考えるときに役立っていることが分かる。道徳学習ノートを継続的に活用することで、道徳学習ノートが考える手立てとなり、児童は友達や家族から教えてもらったよい所や自分の考えたよい所やその理由を見直し、自分のよい所に対する考え方を発展させていくことができた。

以上のことから、道徳学習ノートがよい所を伸ばすことに対する児童の心情や態度を継続・発展させるのに有効であったと考える。

3 「道徳学習プログラム」を通して、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出し、自尊感情を育てることができたか

（1）自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すことができたか

「道徳学習プログラム」を通して、自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すことができたかについて、よい所アンケートの結果から分析を行った。

「自分にはよい所があると思いますか」について、肯定的な回答をした児童が事前は16人（80%）であったが、事後は全員が肯定的な回答をした。

また、図7に示す通り、「よい所を伸ばしたいと思いますか」について、肯定的な回答をした児童が事前の13人（65%）から、事後は18人（90%）に増えた。

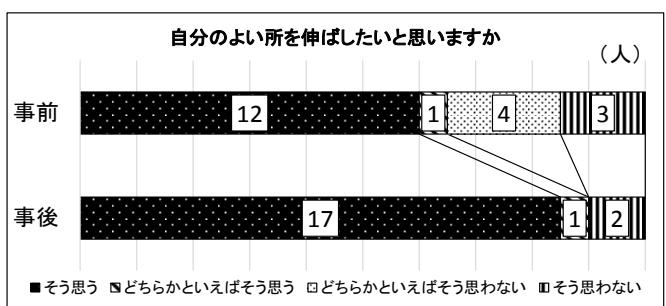


図7 自分のよい所を伸ばすことについての児童の意識

事前に「そう思わない」と回答した児童のうち、事後に「そう思う」に変容したB児について考察する。B児は、「道徳学習プログラム」前には「自分にはよい所がない」と回答していた。しかし、第一段階で友達や家族からよい所を教えてもらうことで自分のよい所に気付き、第二段階で自分のよい所を見つめて、家族の言葉をもとに「妹や弟の面倒を見るところ」を自分のよい所と捉えることができるようになった。そして、第三段階で、自分のよい所を伸ばす方法を考えた時には、「友達に優しくする」と記述し、兄弟から友達へと優しくする対象が広がり、自分のよい所を伸ばそうとする意欲の高まりが見られた。

その後、「友達に優しくする」ことに対して、次に示す通り家族が肯定的な評価をしており、B児の自分のよい所を伸ばそうとする意欲をさらに高めたのではないかと考えられる。

○○は、とても優しい心をもっているので、友達のよい所を見つけたり、話を聞いたりして、いろいろなことを自分のものにしてください。

B児への家族からの記述

事後に「そう思わない」と回答した2人の児童を考察すると、アンケートには否定的に回答していたが、道徳の時間3で自分のよい所を伸ばす方法について考えたとき、道徳学習ノートには、「これからがんばっていきたい」と意欲を示す内容を記述していた。このことから、2人の児童についても、一時的には自分のよい所を伸ばそうとする意欲を引き出すことができたのではないかと考える。

これらの結果から、「道徳学習プログラム」の三つの段階によって、よい所や悪い所に気付くことをもとに、よい所を伸ばそうとする段階へ発展させることができたと考えられる。

(2) 自尊感情を育てることができたか

「道徳学習プログラム」を通して、自尊感情を育てることができたかについて、事前・事後の自尊感情アンケート結果を1～4点で点数化し、表2に示した各領域の平均値を比較した。

その結果、「社会②領域」と「総合領域」は平均値が上がり、「学習領域」は平均値が下がった。

平均値が最も上がった「総合領域」は、自己を肯定的にとらえているかについての四つの項目からなる。また、その中で最も平均値が上がったのは「わたしは、得意なことがあります」の項目であり、図8の通り、肯定的な回答をした児童が事前は14人(70%)であったが、事後は19人(95%)に増えた。

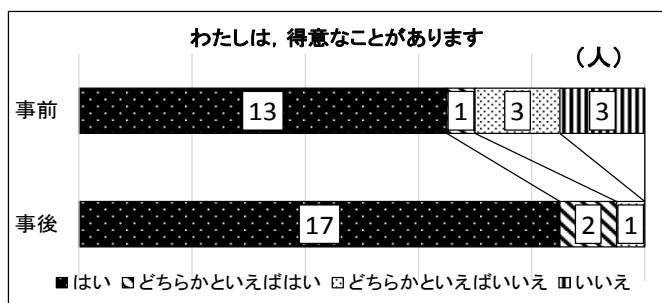


図8 得意なことについての児童の意識

事後に肯定的な回答に変わった5人の児童に共通することは、「道徳学習プログラム」で、友達や家族から「ダンスが上手」や「絵が上手」等の評価を受けていたことである。このような児童にとって重要な他者からの評価により、児童が自分の得意なことを認識できたのではないかと考えられる。

以上のことから、「道徳学習プログラム」における他者とのかかわりが、自尊感情の「総合領域」に影響を与え、変容につながったと考えられる。また、一つの取組により、すぐに自尊感情を変容させることは難しいが、それぞれの領域に対する取組を継続的に行う

ことで、自尊感情を育てていくことができるのではないかと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

「自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム」において、道徳の時間と学級活動との関連を図り、「よい所や悪い所に気付く」「よい所を見つめる」「よい所を伸ばそうとする」の三つの段階を設定した。また、自分のよい所を伸ばすことに対する児童の意識を継続・発展させるために他者とのかかわりや道徳学習ノートの活用を取り入れた。その結果、児童の自分のよい所を伸ばす意欲を引き出すことができた。また、自尊感情の一部の領域に変容が見られ、自尊感情を育てるにもつながっていくことが分かった。

2 今後の課題

今回は、中学年を扱った「自分のよい所を伸ばす道徳学習プログラム」を開発し、授業実践を行った。その結果、自尊感情は、他者とのかかわりや自分を肯定的にとらえることにおいて、高まりが見られた。本研究では、道徳の時間と学級活動を関連させたが、今後は、教科との関連を図ったプログラム等の開発を検討し、長期的な取組が必要であると考える。

また、今後、高学年になることを踏まえ、よい所を伸ばすことだけでなく悪い所を改めることにも視点を置くことで、自尊感情を育てるに当たって有効な取組になると考える。

【引用文献】

- 1) 中島義明他（編）(1999)：『心理学辞典』有斐閣 p.343
- 2) 岩田純一・佐々木正人・石田勢津子・落合幸子著(1995)：『児童の心理学』有斐閣 p.181
- 3) 田沼茂樹(2013)：『心の教育と特別活動』北樹出版 p.67

【参考文献】

- A.W.ポープ, S.M.ミッキヘイル, W.E.クレイグヘッド(1992)：『自尊心の発達と認知行動療法-子どもの自信・自立・自主性をたかめる-』岩崎学術出版社
 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(1992)：『セルフ・エスティームの心理学』ナカニシヤ出版
 永田繁雄(2006)：『セルフエスティームを育てる』『道徳教育』No. 581 明治図書
 榎本博明(1996)：『性格の見分け方』創元社
 荒木篤人(2009)：『平成20年改訂小学校教育課程講座道徳』株式会社ぎょうせい